



# 誰にでも解る 大衆理論

---

世の中の小さな疑問に対す  
る独自の回答

---

浅田 高志

---

## はじめに

---

### 《はじめに》

本を書くに当たって重要なことがあって、小学校4年生の時の担任の先生であった森先生（仮名）の影響を強く受けております。

それと後は、私が一浪した19歳の時に巡り合った、駿台予備校の生徒で、加古川からやってきた松山君（仮名）の影響を受けております。

森先生の場合は、それは生活のあらゆる分野から、経済学・社会学・イデオロギーに関するまで、凄い影響を受けております。

この場合は、私が10歳であったので、内容が全然解らなかったのですが、先生のおっしゃるように、深層心理の中に入れておけということで、深層心理の中に埋まった状態であったところ、20代の頃に猛烈に勉強して、ついに電気が通って明らかになったものです。

松山君に関しては、19歳ということで、これはもういろいろと議論もしましたし、それがどうも噛み合わなかった。しかし今では同じです。

また、森先生と同じように、経済学・社会学・イデオロギーの分野まで、幅広い良くできた理論を持っていました。

この2人とは価値観が全く同じです。

それと、私自身の考察で2人の理論を発展させたり、分析を鋭くしたり、総合を促したりしてきました。

それらの事を延々と述べていきたいと思います。

## 本文1

---

### 《死んだらどうなるかについて》

まずは、人間が死んだらどうなるかについてです。

死んだら『無』になるという考え方もありますが、そうではないという考え方もあります。

死んで『無』になるという考え方に立つと、『自分が永遠に無になる』ということだから、それは非常に空しいです。

『自分が無くなる』ということだから、周囲の人や家族の皆とかの顔が浮かんで来て、『それが無くなるのか！無くなるのか！』と思った時に非常に空しくなります。

それともう一つは、自分が無になった後に、人類も皆、無になって、惑星とか無機物だけが残っていて、ただボーっと続いているだけの存在と言う時に、『自分が全く無い』ということがとても空しくなります。

あの空しい感覚、そういった感覚を皆さんは持たれたことがありますか？

### 《物事は循環する》

例えば、好況・不況というものも循環します。

まず、景気が良くなると、物やサービスがよく売れます。よって会社は利益が多くなります。

それで、給料やボーナスも上がります。

前よりもたくさん貰った労働者は、それだけ前よりも多く買える訳で、需要が増えて、ますます景気は良くなるのです。

逆に、不景気になると、商品が売れなくなります。

よって会社は利益が減ります。

それで、給料やボーナスも下がります。

前よりも少ししか貰えなかった労働者は、それだけ前よりも少ししか買えない訳で、需要は減って、ますます景気が悪くなるのです。

更に言うと、遅れたバスは更に遅れるという訳です。遅れたバスは一本一本バス停を通るのに、標準時刻より遅れてくるのだから、並んでいる人も多くなって、乗り降りにも時間がかかって更に遅れる訳です。

更に言うと、プロ野球のピッチャーが好投して勝利投手になると、それによって自信を付けて、次のピッチングでも好投するという循環です。

今ここに3つ例を挙げましたが物事は循環するという事です。

## 本文2

---

### 《あいの話》

次に『あいの話』についてしておきましょう。

日本語の50音の最初の音は『あ』ですが、英語のアルファベットの最初の音は『A』です。

『A』はローマ字読みをすれば『あ』となります。

このように、日米の両方とも《最初の音が同じ》であるというのには驚かされます。

そして『あ』の次には『い』です。

『あい』『愛』『ラブ』ということですが、英語で『アイ』と言えば『私』を意味する『I』という言葉があります。

『私=愛』ということです。

また、『アイ』と言えば、英語で『EYE』という『目』という意味の言葉がありますが、『魂の灯は目にある』と言って、『目=私』ということが言えます。

このような連想ゲームが考えられる訳です。

### 《資本主義と社会主義》

資本主義と社会主義について考えてみましょう。

資本主義に関しての人間に関する見方というもの、社会主義に関しての人間に関する見方というものを考えるときに、社会主義においては『人間は、同じ状況に置かれた時には同じ行動をする』という、

『労働においても・賃金においても殆ど平等である』という考え方をする訳です。

ところが、資本主義においては『人間の声や顔が何十億人全部違っているように、人間の個性を重視する』という認識です。だから、『それぞれの持ち味を活かしていこう』という政策が執られます。

両極端ではありますが、人間のあり方を捉えていると思われれます。どちらの良い側面も兼ね備えていけば理想的です。スウェーデンの場合、市場の原理を残しつつ、競争の原理を残しつつ、福祉政策においても徹底的に行なっています。これこそが理想国家という観があるのですが、いかがでしょうか？

### 《プロ野球について》

プロ野球について述べていきたいと思います。

江川問題の後、巨人軍は卑怯な手段で江川を採りました。阪神とのやり取りで、小林を阪神に入れたりしましたが、とにかく野球というものはスポーツマンシップに乗っ取り、とにかく正義の象徴とされている観があります。特に子供にとっては平等で・公式な戦いであって、正々堂々という事が強調されます。

汚い手口で江川を採った巨人軍は、世間の非難を浴びて窮地に立たされました。そして、一部の審判団からの巨人軍に対する反抗的とも解釈できるような厳しいジャッジもありました。巨人軍は当時、長島ジャイアンツでしたが、あたかも十字架を背負ったまま、オドオドと試合をするという醜態を晒しています。第一次長島ジャイアンツも江川問題で揺れて、ヤクルトや広島にリーグ優勝をさらわれてしまい、三年連続で優勝できず、長島監督は解任されました。

そして、藤田元司さんが監督になって、もう一つの十字架である『4年に一度は必ず優勝しなければならない』というものを背負って、全盛期だった江川も20勝を上げて、日本一にもなりました。

ここで広島カープの優勝パターンを確認しておきましょう。広島の優勝パターンは決まっていて、開幕ダッシュで首位に立つと、ズーッと首位に君臨し、夏場の中ダルミで首位から転落するものの、ペナントレース終盤になって連勝に連勝を重ねて、優勝するというパターンです。

そして巨人軍の場合は、4年ぶりに優勝したのでありますが、十分な戦力を持ちながらも連覇できませんでした。中日ドラゴンズが引き分けをたくさん積み重ねて、勝率で並行線を辿った挙句、中日に優勝をさらわれております。江川問題に端を発して、優勝してはいけないという考え方が広く一般に浸透していたがために、それに負けたものと思われまます。

それと、日本一になったチームの翌年の負けパターンについても述べておきます。

優勝したチームは翌年出遅れて、夏場あたりに快進撃を続けて、首位に並んだりもするのですが、肝心の秋口からガクンと落ちていくというのが一つのパターンです。

横浜ベイスターズの時も、阪神タイガースの時も、広島カープの時もそのパターンでした。

巨人軍の場合は、『4年に一回は優勝しなければならないという十字架』を背負いつつも、王監督の許に結束して、山内バッテリーコーチを招いたということによる物凄い打撃技術の向上と進歩。集中力の野球によって真剣勝負で挑んだので、中日戦や広島戦などは日本シリーズさながらの迫力でした。

とても高いレベルを感じ、見応えがありました。

## 本文4

---

1985年の阪神の21年ぶりの優勝についてですが、バース、掛布、岡田によるバックスクリーンへの3連発というのがありましたが、打たれたのは槇原です。阪神の監督は吉田監督でしたが、善いところもあったのですが、失敗の多い監督でした。選手の起用法を間違ったりもしていました。

吉武という代打専用の名バッターがいるにもかかわらず、北村を指名したりしていました。そしてその後、吉田イズムの悪いところがだんだん浸透してしまっていて3年目には最下位に転落しました。よそから入った田尾安志とかが言ってましたけど、何かバッターボックスに入ったら『思い切りやったらアカンのかいな!』とってしまうとのことでした。

吉田監督自身も『うちのバッターはバッターボックスに入ると金縛りに遭うとるみたいやな』と行ってましたけど、それは吉田監督がそのように事を運んでしまったのです。これだけは付けくわえておかねばなりません。

### 《量と質について》

量と質について述べていきたいと思います。

何に関しての量と質かと問われると、それは、仕事を指した時の量と質とも捉える事ができますし、もう一方で、量が肉体で、質が精神という捉え方もできます。

仕事の量と質について言えば、人それぞれ違っていて、標準タイプがあって、量も質も平均タイプです。そして量は多くするのだが質が伴わない人（このタイプを量的人間と呼んでいます）。

量も多く、質も高い仕事をする人。

量も少なく、質の低い仕事しか出来ない人。

量は多いけれど、質が低い人。

量は少ないけれど、質の高い人。

以上のような分類が出来ると思います。

また、量を肉体、質を精神に例えた場合、これもまた、肉体の力・精神の力のバランスが、まずまず、平均点の人が標準タイプです。

肉体の力も強く、精神の力も強い人。

肉体の力も弱くて、精神の力も弱い人。

肉体だけは強くて、精神の力は弱い人。

## 本文5

---

肉体は弱い、精神の力は強い人。  
以上のような分類が出来ると思います。

そしてマルクスは、量と質に関しては、『量が一定以上増える事により、それが質の向上に繋がる』という風に『量と質』を関係づけていました。

『最終的に全てを決定付けるのは量である！』という風にマルクスは結論付けておりますが、私はそのようには考えておりません。

### 《自由について》

これから自由について考えてみたいと思います。  
皆さんは『自由の定義』についてどう思われますか。私の自由の定義を読んでください。

自由とは・・・

『自由とは、人に迷惑を掛けない範囲の中で、  
明るくて、温かくて、冷静で、静かで、窮屈でなく、理想があって、自信があって、空腹でなく、災害に遭わず、管理されてなくて、体を拘束されてなくて、臭くなくて、手ぶらで、待たされてなくて、健康で、性欲が満たされていることです』

### 《バブルについて》

バブルについて述べたいと思います。

1990年代、日本の経済はバブルがはじけて大変なことになりました。  
その発端は『カネ余り現象』というのがあって、何処でもカネが余っていたのです。それなら、福祉政策を充実させることも出来たはずなのですが、資本主義国家である日本国はそのようには動きませんでした。それらのカネは動かさなければなりません。お札を刷って・刷って、刷りまくったはいいが、カネは動かして幾らです。

大前研一氏が言うておりましたが、『ゴルフの会員券が一枚一兆円にでもなれば治まったのかも知れませんが、東京が世界の金融の中心地として益々、栄えるであろうという名目で、土地取引にのめり込んでいった。』ということです。

そして、土地の売買に明け暮れて『地上げ屋』が横行し、土地の値段が急騰し、『億ション』と

という言葉が流行り始めた頃には、巨富を投じて買い集めた土地や物件が、売り捌け

## 本文6

---

なくなっていて、不良債権と化してしまったのです。銀行や不動産業者が強い態度に出るようになり、不動産で儲けようとした殆どの投資家が、返し切れないほどの借金を抱え込んでしまったという状態です。

そして、売れない土地の値段はどんどん下落する一方です。バブルによって巨額の負債を抱え込んでしまった人たちは益々、返済が困難になる一方です。

バブルに踊り狂わなかった人々にとっては、待てば待つほど、土地や物件が安くなっていくので……、禁句になるので、これ以上は言いません。

資本主義の将来について、シュンペーターは言いました。『良識ある経営者によって、資本主義は巧くいくだろう！』と。同じことが、アメリカでも起こり、世界恐慌となりました。資本主義というものは恐ろしいのかもしれない。

### 《法の甘えについて》

主婦などが、交通事故を起こした時に言われるのが『業務上過失致死傷の疑いで書類送検しました』です。

何で、主婦の起こした交通事故が『業務上過失』なのでしょう？主婦業が立派な職業として扱われているからなのか？

居住地区の道路事情や、何らかの事情で、どうしても車が必要な人だけに、『業務用かどうか？』など、『本当に必要かどうか？』を自動車メーカーが確認して販売しているからなのか？交通事故が、何でもかんでも『業務上過失致傷罪の疑い』として扱われることの理解に苦しみます。

### 《国民の本当の地位について》

よく日本で言われるのが『公私混同』という言葉です。『公の中に私を入れる』という意味でよく使われます。けれども逆に言えば、『私の中に公が入る』という考え方も出来る訳で、そういう見方をすれば、それぞれの日本人は公務員であり、しかも、あちらこちらに派遣されたりするので『国家公務員であると言える』という考え方も出来るのではないのでしょうか？

### 《物の価格の決め方について》

ここで、物の値段や価格がどのようにして決まるのかについてお話したいと思います。

市場経済の資本主義体制においては、おなじみの需要曲線と供給曲線の交わる所で数量と価格が決まるという訳ですが、一概にそうとも言えない点も多く指摘できるのです。

ある貴金属を販売している会社の経営者が『貴金属というものは需要が少ないので、価格が高くなることはやむを得ない！』などと言ったのです。実はそれは間違いで、需要が少なければ価格は下がるはずなのです。この経営者は、それを言った途端、『シマッタ！』という表情をみせましたが、どういう値段の付け方をしているのでしょうか？

タクシー業界も、お客のタクシー離れが進み、少ない乗客でも儲けが確保できるようにと『値上げ』に踏み切ってしまう。そうすると、益々、タクシー離れが進むという悪循環です。最期は破滅？でしょうか。

以前の国鉄がそうでした。客の国鉄離れを覩て、運賃の値上げに踏み切ってしまった。乗客離れによる利潤低迷を、運賃の値上げだけで賄おうとしたので、崩壊は時間の問題だったわけです。

これは、どういうことなのでしょう？

公共財のように、赦される価格は決まっているということです。

市場の持っている需要と供給の曲線で物事が決まるという欧米式の教科書的な発想に移行しつつありますが、『売れないから、値上げして、利潤を守ろうとする。高いから誰も買わない。』という悪循環をいまだに繰り返しているケースが多く見られます。

それとは逆に、需要が高まれば、値段を上げてても売れるのですが、日本人はある程度売れて儲かったら、妙に満足してしまっって値段を下げてしまうのです。ここが、日本人の美点と言ってしまうとそれまでなのですが、発想を転換する必要があるようにも思われました。

今回はこれでおしまい。